

紹介

藤森 照信 評

環境リスク学——不安の海の羅針盤

中西肇子著(日本評論社・1890円)

日本に住んでぶつうに水を飲み空気を吸う人にとって、タバコの煙とダイオキシンのどっちのリスクが高いかごんじだろつか。数年前の騒ぎを覚えてる人は、ダイオキシンと答えるだろう。でもちがう。ダイオキシン騒動の後に出された本を読んでいる人は、タバコの方が悪いと見当はずれ。でもどていと願いかまでは分らない。ダイオキシンの害は、タバコのおよそ300分の1にすぎないのである。

ダイオキシンを代表格とする環境ホルモンが問題になった時、たとえば多摩川のヨイはメスが異様に多いというようなコワイ話が聞心を呼んだ時、著者は、「環境ホルモン空騒ぎ」という論文を発表した。

「この論文を書いて発表する時は、身の震える思いでした。環境保護や人の安全を守れという旗印の主張に全面的に反対かうものだからです。大学院を卒業してからずっと環境問題に身を投じ、まさにそのためにさまざまな苦しみをしてきた私にとって、それはとてもつらいことでした」

「原理」より地道な調査貫いた研究者

御用学者の発言と取られかねないが、30年ほど前、日本の公害研究と運動に今日まで脈々とつづ

新しい核を結成したのは、当時の東大都市工学科の宇井純と中西肇子なのである。

もし彼女の地道な調査と、成果の果敢な公表がなかったら、今の日本の水と空気、とりわけ水はだいぶちがったものになっていただろう。

されなことが明らかとなる。実は、それまでもそんなことを調べる化学者はいなかったのである。現在工場排水は別個に処理されている。

下水についてもう一つ。下水は都会で成立し発達したという事情から、東京なら多摩川とか隅田川とか広範な流域単位で下水を集めて下流の処理場で処理する。流域下水システムしか30年前にはなかった。人家のまばらな田舎でもこのやり方を真こうと当時の建設省は考えていた。そうでない補助金をつけない。でも現在はそんな

いうか世界のどこでも同じかもしれない困難にさらされている。大が、学界、行政からの村八分。村八分状態に陥った彼女を支えたのは、一部の研究者であり学生であり行政の有志だった。

日本の行政も捨てたもんではない。そのことは、土建国家日本が、中西の主張をいつしか受け入れて、システムを30年前とは一変していることから分かるのだが、彼女自身も、環境リスクの研究を支えてくれた方の第一に学生を挙げた後、

「二番目に、……旧文部省の、

ことはなくて、市町村の家屋分布の疎密の実情に応じて、公共で流域単位でやるのも地区ごとに処理するの、あるいは自分の家専用の個人下水でもかまわない。ちゃんと補助金はつく。

工場排水は別に処理する。実情に合った方式を選ぶ。という今日では当たり前前の下水のあり方は、彼女が中核となって確立した。

どなたかよくわからない方のお陰です。このお陰で、四人もの教官が私の周りに集まり、リスク研究を始めることができたのです。：第四に、国の政策決定にリスク評価を採用し、かつ、産総研にCRM(化学物質リスク管理研究センター)をつくらせて、私を迎えてくれた経済産業省の若い人たちのお陰です」

「考えた末、政治闘争には参加しないけれども、自分自身が仕事上でぶつかった問題からは逃げないで、それだけはどんなことがあっても闘おうと思つたのです。」